



114
A1305



下ノ事皆隨テ盛ナラサルハナシ伏シテ惟ル
 ニ維新以降
 朝廷之政頗ニ一變シ兵制ナリ教育ナリ法律
 ナリ工業ナリ彼ノ歐米ノ長ヲ取り而テ我ノ
 短ヲ補ヒ以テ我國今日ノ隆盛ヲ促セリ然リ
 而テ獨是ノ大本タル農業ニ至テ進歩ヲ見ル
 甚タ遅々タル者ノ如シ此レ翼ノ以テ杞憂ニ
 テ措ク能ハサル所ナリ抑方今我國憂患ノ最

建議

大正十一年四月贈
大隈侯爵郵奇



モ大ナル者ハ外債ナリ輸出入ノ不平均ナリ
然レテ聞ク所ニ據レハ廟謨己ニ是ノニ憂患
ヲ除クノ道立テ外債ハ年賦ヲ以テ償却スル
ノ目的ヲ立テラレ輸出入モ亦々條約ノ改正ヲ
漸行レテ此ノ平均ノ度ヲ調理セララルト然
則我邦ハ全ク憂患スヘキ無キ乎曰否現今我
國ヲ以テ之ヲ人ノ病ニ譬ルニ猶ホ瀉痢ヲ病
ニ疲弱ヲ来タセシ者ノ如シ是故ニ目下條約
ヲ改正スルモ外債ヲ償フニ年賦ヲ以テスル
モ唯瀉痢ヲ防クニ止ルノニ到底自ラ疲弱ノ

躰ニ肉ツクルニ足ラス是ヲ以テ此ノ病ヲ療ス
ルニハ宜シク疲弱ヲ補テ氣力ヲ回復シ之ニ
加ルニ益滋養ヲ施シテ身体ノ健全ヲ保タシ
ムルノ目的ヲ確立セサル可テス然リト金氏
疲弱ヲ補ヒ滋養ヲ施スノ事一朝一夕ニシテ
能ス可カラス必ヤ之ヲ永遠ニ期シテ而後可
ナリ翼熟考ルニ國ヲ醫シカヲ健全ナラシム
ルノ方午緒萬端ナリト金氏其大要ヲ擧クレ
ハ山野ノ開墾ト植物ノ改良トニ外ナラス竊
カニ聞ク日本ハ山林荒野尚多クシテ壤地ハ

僅カニ其十分ノ一半ニ居レリト因テ今豫
メ民用材薪水料等ハヲ量リ之ヲ全國現教人
口ノ二三倍ニ充ツ可カラシメ其餘ス所ノ土
地ハ悉ク開墾スヘシ譬ヘハ日本ノ壤地現在
ノ半ヲ増拓シ得レハ則新ニ又日本ノ半國ヲ
得ルナリ隨テ租稅國用モ亦々半國ノ富ヲ増
スヘシ加之植物改良ノ道ヲ施サハ則其ノ土
産ノ利ヲ増加スル論ヲ俟タスシテ知ルヘシ
今此ニ一地方アリ石田瘠土後未之ニ植スル
ニ稻ヲ以ス之ヲ耕スニ非常ノ労力ヲ竭シ之

ヲ長セシムルニ多分ノ肥料ヲ施シ渠ヲ鑿テ
溝ヲ堀リ水ヲ引クト甚便ナラス或ハ水車ヲ
以テ夜ヲ日ニ繼キ其勞費ヲ厭ハス以テ収獲
シ得ル所ノ利一段ノ地ニシテ僅カ米一石内
外ニ過キス是レ勞多シテ益少キモノナリ故
ニ此ノ如キ土地ニハ断然稻ヲ廢シ之ニ代ル
ニ葡萄等ノ如キ物ヲ以テセハ其收穫ノ利稻
米ヲ種ルト霄壤ノ違アルハ言ヲ用ヒスシテ
明瞭ナリ又茲ニ山圃アリ之ニ種スルニ麥菜
ノ類ヲ以テスレバ一段ニシテ麥實ハ四五斗

菜實ハ二三斗ヲ得ルニ過キス甚僅々タラズ
ヤ故ニ此ノ如キ地所ニハ之ニ植スルニ楮桑
ノ如キ物ヲ以テセハ其利五六倍スル疑ハサ
ル所ナリ故ニ土地ノ質分ヲ審カニシ植物ノ
良種ヲ播スルハ則收穫ノ増加スル亦多分
ナラン之ヲ平均シテ從來全國所納ノ半ヲ増
セハ是我大日本ニ又日本ノ半國ヲ増加ルナ
リ今ヤ政府新々ニ農商務省ヲ設ケラレ益殖
産貿易ノ道ヲ擴張セラレントス翼之ヲ聞テ
踴躍抃喜ニ堪エス因テ又希クハ此時ニ際シ

先ニ速ナル所ノ内地開墾ト植物改良ノ大舉
アラハ果シテ此省ヲ設立セラレタルノ主旨
ニ適合セシ其方法ノ如キハ敢テ片紙ヲ以テ
盡ス可ニ非ス且實際施行上ノ至テハ豫
シメ之ヲ陳述シ難シ因テ其大畧條件ヲ挙ク
ルヲ七、如シ
第一條 全國ニ農區ヲ分置シ農務局ヨリ毎
區ニ官吏ヲ出張セシメ地方長官ト協議シ
觀業課ニ命令シ開墾ノ事務ヲ調理スル事
第二條 各地方廳ニ於テ審カニ土地ノ開荒

ヲ調査シ新タニ開墾スヘキ土地何程アル
ヤヲ定ムヘキ事

第三條 開墾ハ可成丈ケ人民ノ會社ニテ執
行スヘク民力ノ堪ヘサル場合ニ臨ジテハ
政府ヨリ扶助有ルヘク又人民ノ結社ニテ
都合善カラサル場所ハ政府ヨリ着手セラ
ルヘキ事

第四條 開拓ハ成ル丈ケ無産士族ヲシテ後
事セシムヘキ事

第五條 人民結社ニテ開墾スヘキ地所ハ則

人民ノ御拂下ケニナリ當分無税民有地ニ
屬スヘキ事

但代價ハ極廉價ニシテ年賦納金ノ事

第六條 政府ヨリ開墾ノ場所ハ農務局ノ管
轄ニシテ他日成熟ノ上人民ノ御拂下ケ
ニナルヘキ事

第七條 開拓器械或ハ農具等ハ新發明ノ良
品ヲ使用スヘキ様農務局ヨリ教導之レ有
ルヘキ事

第八條 開墾ヲ遂ケシ土地ニハ適當善良ノ

植物ヲ播種スヘク研究試験ノ事ハ農務局ヨリ教導之レ有ルヘキ事

第九條 人民結社ノ開墾ト金氏農務局ヨリ干涉シ其ノ方法ノ得失實施ノ利害等一々検定シ便宜善良ノ方ヲ執行スヘク夫々詳細ニ教導之レ有度事

第十條 植物ハ各農區ニ最當ノ良種ヲ撰播スヘク類多キヲ貴ハス三四種若クハ五六種ヲ以テ要用トスヘキ事

但シ試験場ハ之ニ及シ成丈ケ多種ナル

ヲ要ス

第十一條 開墾場ニハ其植物ノ品ニ因リ製造場ヲ設立スヘキ事

第十二條 各農區ニハ農業學ニ通達シタル者ヲ任用シ平日其地方ヲ巡回シ其業ヲ教授誘掖セシムヘキ事

右謹テ鄙見ノ概略ヲ上陳ス尊覽ヲ賜クヲ得ハ翼ニ於テ何ノ幸カ之ニ過キニ頓首再拜

明治十四年五月廿九日

石井翼

參議大隈公閣下